

研究ノート

語彙力、読解方略、動機付けを育成する 2年間のリーディング・カリキュラムの構築

今井由美子

同志社女子大学
表象文化学部・英語英文学科
助教（有期）

大塚朝美

同志社女子大学
表象文化学部・英語英文学科
嘱託講師

若本夏美

同志社女子大学
表象文化学部・英語英文学科
教授

1. はじめに

同志社女子大学英語英文学科は、2009年度のキャンパス移転と同時に新カリキュラムを開始した。これを機に、必修科目であるリーディングの授業において、学生の学習動機を保ちながら語彙力と読解力の向上を図ることができる授業内容や授業運営を目標に、カリキュラムの見直しを行った。

学生たちの学習への取り組みを振り返ると、まず学生の授業外学習の困難さが挙げられる。課題が与えられれば、前向きに学習に取り組む姿勢は見られるが、積極的な自律学習を期待するのは難しい。一方、リーディングの授業では、読んで訳す、つまり英文の全訳をすることが授業の最終目的であるという考え方が今なお根深くあることも事実である。読んで訳すという指導法は、教える側にとっても学習する側にとっても安心できる方法であるが、それに終始せず、何のために読むのか、その目的の違いによって多様な読み方を学ぶ重要性を伝える必要がある。では、積極的な自律学習を意識した読解練習または授業のあり方とはどのようなものであるべきだろうか。この問いに対し、1) 学習者の年齢や学習動機〈学習者要因〉を基準に、2) 学習者がどの学習段階〈ステージ〉にいるのかを

把握し、3) 学習者は何のために読むのかを想定し、その目的に適した方法〈タスク〉を効果的に取り入れた読解練習・授業を目指すものであろうと考えた。本論ではこの3点に配慮したリーディングの授業カリキュラムがどのように構築されたのか、受講学生の英語能力の伸張や英語学習に対する意識の変化を含め議論したい。

2. リーディング・コースデザインにおける5つのポイント

リーディング・コースを組み立てる上で、考慮すべき点を次の5つとした。

第1に、多様な読解方略のトレーニングを含むコースをデザインすることである。伝統的な訳読という読み方だけではなく、スキミング（文章の概略を知るために素早く全体に目を通す読み方）やスキッピング（文章中の特定の情報を求めて素早く読む方法）といった目的に適した多様な読解練習を重ねることで、読解能力における可能性を広げることになる。日本人英語学習者の訳読に終始する読解からの脱却を目指すことが必要である。

第2に、学習者の語彙力を強化することである。リーディングに限らず、さまざまな場面において大学生の語彙力不足が指摘されており、リーディングの授業において可能となる語彙力強化を求める。

第3に、学習者の読解力促進のための背景知識を広げ深めることである。特に文系の学生は、

入試の受験科目が少ないことから、理系の学生と比べて読む分野やジャンルに偏りがあることが多い。リーディングの授業で扱うトピックや分野の多様化とそれに関連する背景知識をどのように与えるかその工夫が必要とされる。

第4に、学習者自身の学習への動機づけとその持続性を高めることである。日本人英語学習者は English as a Foreign Language (EFL) として英語を学び、日常生活では必ずしも英語を使う必要のない環境で、英語を勉強し続けるための強い動機が必要となる。よって、その動機を維持するきっかけを提供することが必要である。

第5に、学習においてその効果を高めるための多様な言語活動である。授業に新しい教材や授業方法を取り入れることに対して、必ずしも積極的でない教員が存在することは否定できない。慣れ親しんだ授業方法から新しいことへの挑戦は、勇気と覚悟を要し、また新しい教材や教室環境に慣れるまでは忍耐が必要となる。しかし、現代の学生の気質や彼らのニーズに合わせた授業改革には、教員の授業に対する意識改革も必要なことであると考えられる。

この5点を軸として、2年間で4タームのカリキュラムの構築を行い、大学1年生から2年生のトータルなコースデザインを試みた。

3. 共通の語彙活動

3-1 使用テキスト

2年間4タームを通して『英単語・熟語ダイアログ 1800-対話文で覚える』（秋葉・森、2005）を語彙学習用テキストとして用いた。このテキストは、アメリカの日常生活、慣習・制度、娯楽・レジャー、健康・医療、環境問題、ビジネス、科学技術、政治、法律、社会問題など10のテーマをもとに110のユニットにより構成されている。各ユニットにはダイアログ、日本語訳、ダイアログに関するコラム、ダイアログで扱われた語やイディオムが10ほど取り上げられ、意味と例文が添えられている。春秋学期を通し、バランスよく10のテーマか

ら20のトピックを選び、その結果2年間の授業で40のトピックについて学生らが学習する機会をもてるように工夫した。このテキストはリーディングだけではなく、リスニング、スピーキング、ライティング、総合英語の授業においても、各スキルの特徴を活かしながら使用され、それぞれの授業で、同一のトピックを前後一週間で学習するよう計画されている。

3-2 語彙学習方法と背景知識の活性化

『英単語・熟語ダイアログ 1800-対話文で覚える』を用いた語彙学習方法と背景知識の活用方法は下記のとおりである。

まず、語彙学習の目的はトピックに関連するキーワードやキーフレーズが文脈でどのように使われているか、つまりスキーマ（背景知識）を学ぶことにある。このテキストは単なる単語集ではなく、ダイアログの中での語句の使用方法がわかり、その語句が使われる背景についても学べるように構成されている点で、トピックについての興味やさらなる関心を引き出すきっかけとなる。さらにスキーマを活用させるために、共通テキストに加え、トピックに関連する記事を読む活動も授業の中で行った。インターネット上サイトよりトピックに関する記事を選び、“News Flash”と名付けた400語程度のパラグラフの読解用課題を用意し、学生らは10分程度の時間をかけ初見での読解を試みた。短いがまとまりのある英文を制限時間内で集中的に読む練習は、どのようなトピックを与えられてもそれなりに対処できる心構えをつくるためのよい練習機会となった。News Flashの内容について、設問に答え、サマリーを書くなど、理解度を確認する課題も適宜行った。また、語彙定着を図るために、テキストおよびNews Flashからの語句について、アナライザーを使用したクイズを毎週行った。

4. 2年間4タームの活動

ターム1（1年生春学期）では、共通の語彙学習の後、2冊の教科書を用いて、読解方略を

学んだ。『リーディング・ストラテジー』（北尾・北尾、1994）では、様々な読解方略を学び、それらを実際に用いた読解練習を行った。また、TOEICのリーディング・パートのみを扱った『文法・読解で高得点をねらう新 TOEIC Test』（安藤他、2007）では、TOEICの形式に沿った文法問題や資料の読み取りなどに取り組んだ。

ターム2（1年生秋学期）では、ターム1で用いたTOEICのテキストを継続使用し、さらに Science Research Associates（SRA）を利用したレベル別読解演習を行った。SRAは、まず Rate Builder という簡単な診断テストを行い、自分の読解力レベルを測定する。レベル毎に色分けされた教材から、学生は各自のレベルに合った色のカードを選び、読み始める。内容理解の設問における正解率が8割に達すると次のレベルに進むことができるシステムで読み進めた。毎回の授業では、学習記録レポートに解答を記入し、各自で採点し、その記録と内容についての感想や授業に関するコメントなどを書き、提出させた。

ターム3（2年生春学期）では、共通の語彙学習の後、e-learning教材の ALC NetAcademy 2のリーディング・パートを利用した自律的課外学習を与えた。全体で50ユニットから成るが、授業では毎回1ユニットを扱い（春学期中

に13ユニット）、残りのユニットについては各自で読み進めるよう指導した。どこまでユニットを終えたかをチェックするための進捗記録用紙を配布し、記録および保管させた。ターム4に入り、課外学習課題の進捗状況を確認するためにその記録用紙を提出させた。

ターム4（2年生秋学期）では、新たに *Hungry Planet: What the World Eats*（鶴岡・佐藤、2007）を使用した。このタームでは、文中における英文の内容理解促進のために、積極的な母語使用と文法知識をストラテジーとして利用させた。必ずしも全訳をするのではなく、内容理解に直結するトピック・センテンスやキーワードを含む文などをあらかじめ選び、その構文理解や意味を日本語で考え、確実な理解へつなげる練習を行った。他の部分ではできるだけ英語のまま内容理解につなげられるよう習慣づけることを試みた。

図1はターム1からターム4のリーディング活動とその流れをまとめたものである。

このように、語彙学習を軸とし、背景知識活用のためのコンテンツ・スキーマ、文法確認およびパラグラフ構造理解のためのフォーマル・スキーマ、スキミング、スキヤニングなど必要に応じたリーディング・スキルを適宜応用できるようにするための練習を行い、学習者の自律

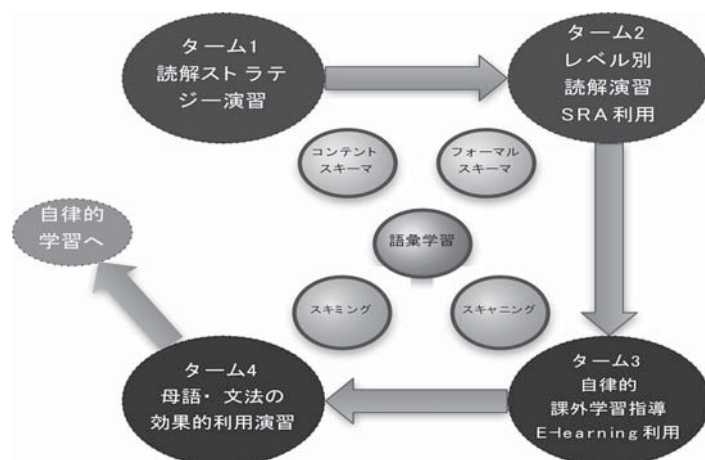


図1. ターム1～4の諸活動

学習へとつなげることを目標に取り組んだ。

5. 学生の意識調査

5-1 Belief 調査

このような取り組みに対して気になるのは学習者の反応である。学習者の授業への取り組みについては、ターム2の終了時（1年生秋学期末）とターム4の終了時（2年生秋学期末）に、2種類のアンケート調査を行った。

1つはBelief調査で、Horwitz (1987) によるBeliefs About Language Learning Inventory (BALLI), ESL Student Version を日本語に訳したものを一部改変して利用した。英語学習における35の質問項目に対し、1) 強く思う、2) そう思う、3) どちらでもない、4) そう思わない、5) 全くそう思わない、という5段階評価の回答を求めた。

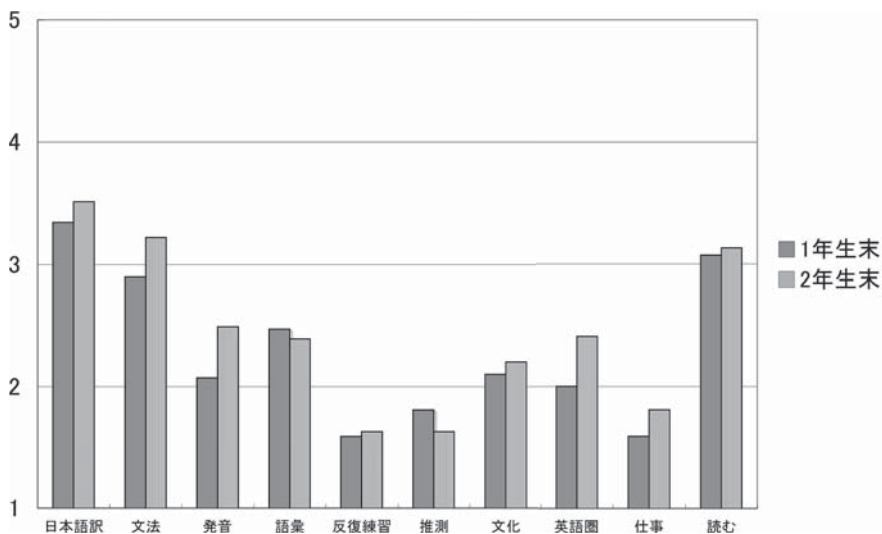
表1は1年次と2年次の回答において注目すべき10項目をまとめたものである。

リーディングにおける「日本語訳 (Q: 英語学習では日本語を英語へなおすことが最も重要である)」や「文法 (Q: 英語学習では文法が最も重要である)」の重要性については、2年生終了時では1年生終了時に比べ、位置づけが

低くなっていることがわかる。英文を読み進める際、逐一日本語に訳すことが少なくなり、また文法をより理解することで、文法への苦手意識が減ったことにより、「文法」の必要性を低くしているものと思われる。また、リーディングの授業では、内容理解が主目的であるためか、「発音」のよさ (Q: とてもよい発音で英語を話すことは重要だ) を授業に求める姿勢は、2年次では否定的傾向を示した。

「語彙 (Q: 英語学習でもっとも重要なことは語彙を覚えることである)」、「反復練習 (Q: 英語学習で反復練習を多くすることは重要だ)」および「推測 (Q: 英語の単語がわからなかったら推測してもよいと思う)」については1年次、2年次ともに重要性を認識している。リーディング活動を内容理解へと導くのは語彙力が基本になることを理解しており、ただ読み進めるのではなく、目的に合わせた読み方を意識して練習することが効果的な読解を可能にすることを理解し、反復練習の必要性も感じている。1年次よりも2年次では語彙増加、文法理解をより期待できることから、推測しながら読み進めることの重要性がさらに肯定された結果となった。

表1. Belief 調査における10項目



一方、「文化（Q：英語を話すためには英語話者の文化を知る必要がある）」を理解することや「英語圏（Q：英語は英語圏で学習するのが一番よい）」で学ぶことの重要性についてはやや否定的な結果を示した。これは、日本にいたながらも英語力を向上させることが可能であることを認識している結果とも捉えられるが、英語を取り巻く文化に対する興味よりも現実的な結果を求める学生の傾向を示しているのかもしれない。

「仕事（Q：英語がうまくなればいい仕事のチャンスが増えると思う）」は「道具的動機」に関連する質問項目である。英語力をつけること、つまり英語による意思疎通が可能になれば将来の就職につながるだろうと考え、1年次から2年次へと、就職を見据えた道具的動機への意識は強くなっているとみられる。

「読む（Q：英語を聞くよりも読む方がやさしい）」という活動についての意識は1年次も2年次も変わらず、依然「簡単ではない」と感じている。2年間のリーディングの授業を受講し、読むことの難しさや奥の深さを感じたものと推測する。また、娯楽のための読書と、必要な情報を探し出すような内容理解を目的とした読解の違いを認識しているのかもしれない。

5-2 大学実施の授業アンケート調査

表2はターム2およびターム4の最後に行っ

た大学の授業アンケートの4つの項目の結果である。

リーディングの授業に対する「授業の理解度（5：とてもよく理解できた、1：まったく理解できなかった）」、「授業に対する意欲（5：とても意欲的に取り組んだ、1：まったく意欲的ではなかった）」、「知的好奇心（5：大いに満たすことができた、1：まったく満たされなかった）」において、1年次から2年次にかけて、高く維持できていると学習者は評価している。2年生では、より難しい内容を扱う機会も多くなるが、より深く知りたい、読みたい、理解したい、という意欲と知的好奇心はわずかではあるが上昇している。「授業のレベル（5：高すぎる、1：低かった）」はどうかという問いに対しては、「3：適切なレベル」と「4：やや高い」に受講生の回答は集中し、「低かった」という回答はなかった。

6. まとめとこれからの課題

キャンパス移転と同時に新カリキュラムを開始した英語英文学科は、必修科目のリーディングの授業において、学生の学習動機を維持しつつ、語彙力と読解力の向上を図ることを目的とした授業内容や授業運営に取り組んだ結果、まとめとして次の4点を報告する。

第1に、語彙学習、スキーマ強化、ストラテジーの理論・実践を中心として、ターム毎に学

表2. 授業アンケート4項目における調査結果

	1年生（ターム2）終了時 (2010.1月実施、n=32)	2年生（ターム4）終了時 (2011.1月実施、n=29)
授業の理解度	4.25 (3.77) : 93.8%	4.14 (3.83) : 96.6%
授業に対する意欲	4.13 (3.83) : 87.5%	4.17 (3.86) : 100%
知的好奇心	4.09 (3.86) : 84.4%	4.17 (3.92) : 96.5%
授業のレベル	3.38 (3.49) : 65.6%	3.38 (3.50) : 62.1%

習内容に変化を持たせたコース設計は、一定の成果があったことがアンケート調査の結果から明らかになった。何を目的に読むのかを学習者が意識し、必要に応じて適切な方法を自ら選びだし応用できるようになるためには、まずその方法を知らなければならない。さらに内容をより理解するためには、語彙を中心とし、背景的知識や文化・歴史などを含めたスキーマを強化するために、幅広いジャンルに及ぶトピックについてのリーディング活動を、さまざまなストラテジーを用いて行う必要がある。学習者のリーディングに対する姿勢を、授業を通して形成できたことがこの結果につながったといえる。

第2に、理論だけでなく、学んだスキルを実践で活かすという双方向からのアプローチは重要である。授業における課題への取り組みはもちろんのこと、英語力測定のための TOEIC や TOEFL において、飛躍的に得点が上昇した学生は、集中力と忍耐力を必要とするそれらのテストの際にもストラテジーをうまく応用できたという手ごたえを感じており、アンケートにそう記述している。

第3として、日々「成長する学習者」に合わせ、教壇に立つ側も「成長する教員」であるべきである。そのために、慣れ親しんだ教え方から、未知の分野あるいは馴染みのない CALL を駆使しながら授業を展開するなど、新しい方法や環境へ挑む気持ちをもって授業に臨まなくてはならない。

第4に、教える側のチームワークが授業の成り立ちに影響を与えるものである。受講者に対し、同じ内容を、複数の教員が進度を揃えなが

ら授業を行うと同時に、90分という限られた時間の中で、複数のリーディング活動を行わなければならない。これらを行うためには、担当教員による綿密な打ち合わせ、教材作成や準備、進度調整などが当然必要となる。担当教員がチームとなって学習者を導くために、試行錯誤しながら改善を図り、バランスを保ちながら授業を進めていくことは容易ではないという現実があることを忘れてはならない。

英語英文学科は2012年度末にいよいよ新カリキュラムの完成年度を迎える。授業評価方法も含めたコース設計の見直しが予定されており、さらなる充実を図るつもりである。

注 本稿は、第37回全国英語教育学会山形研究大会における口頭発表に加筆修正したものである。

参考文献

- ALC Education Inc. (2010) *ALC NetAcademy 2*
 秋葉利治、森秀夫 (2005) 『英単語・熟語ダイアログ 1800』東京：旺文社。
 安藤裕介、Rory Britto、市川野康、松田敦司、八尋春海、山口みほ (2007) 『文法・読解で高得点をねらう新 TOEIC Test』東京：松柏社。
 Horwitz, E. K. (1987) Surveying student beliefs about language learning. In A. Wenden & J. Rubin (Eds.), *Learner Strategies in Language Learning*, 119-129.
 北尾 S. キャスリーン、北尾謙治 (2008) 『リーディング・ストラテジー』東京：英潮社フェニックス。
 鶴岡公幸、佐藤義明 (2007) *Hungry Planet: What the World Eats*、東京：松柏社。